

## 閉会あいさつ

生存圏研究所長 川井 秀一

本日は、京都大学附置研究所・センター主催のシンポジウムを、朝早くから、夕方遅くまで熱心に聴講いただき、まことにありがとうございました。「京都からの提言」ということで、昨年、東京で第1回を開かせていただいたのですが、それに引き続いて、湯川・朝永両博士の生誕百年に因んで、両先生と大変ゆかりの深いこの大阪の地において、両先生と関係の深い研究所から講演テーマを選択してシンポジウムを開催させていただきました。

京都大学には、17の附置研究所とセンターがございますが、多様な研究者が毎日様々な研究に励んでおります。本日も、素粒子、量子といったミクロの世界から宇宙の話まで、幅広い分野で活躍している先生方にご講演をいただいた訳でございます。

国立大学も平成16年に法人化されました。市民のみなさん、そして社会に対して、我々大学の研究者が一体どのような研究をしているのか、社会的な課題に対してどのように取り組もうとしているのかを説明し、みなさんに理解をしていただくことが、大変重要になっています。一般に、「大学は大変敷居が高い」、「大学の先生の講演はむつかしい」ということになっていますが、本日はいかがだったでしょうか。

(拍手) ありがとうございます。

多少、数式もございましたが、多くは大変理解しやすいものだったと思いますので、みなさんの大学の先生に対するイメージも多少は払拭されたことと思っております。

湯川・朝永両博士は、学術だけではなく、社会活動や文化活動にも熱心に参加され、先ほどから話がありましたように、核兵器の廃絶、平和運動にも熱心に取り組まれました。

私達も両先生の志を受け継いで、このようなシンポジウムを通じて、知の情報を社会に発信して、皆さんと一緒になって、連携と対話を深めていきたいと思っております。

終わりにになりましたが、本日、ご講演をいただいた先生方、パネラーの方々にお礼を申し上げ、また、本シンポジウムを後援いただきました読売新聞社にもお礼を申し上げます。

来年、3月には、また日本のどこかでこのシンポジウムを開催いたしますので、ぜひ、大阪からもたくさん参加いただき、我々とともに考えていただければと思います。

本日はまことにありがとうございました。